

新古典派均衡モデルにおけるMMT 支持的なケース —2つのマクロ経済学の統合に向けて—

村瀬 英彰

〈要旨〉

本稿は、経済主体の最適化行動、完全予見、瞬時的な価格調整、および継続的な市場均衡を仮定したマクロ経済モデルにおいても、現代貨幣理論の政策主張を支持する結論が得られるか否かを検討する。とくに、本稿がB レジームと呼ぶ「銀行の最適化行動により準備預金がTirole (1985)の意味でのバブルとして保有される均衡」においては、マネーファイナンスによる財政拡張政策がインフレ率および名目金利の上昇を伴うことなく経済成長率を上昇させうることを示す。B レジームでは、こうした通貨供給とインフレーションのリンクの消失、財政赤字と名目金利のリンクの消失に加えて、永続するデフレーションと低位の経済成長が均衡現象として出現する。したがって、本稿のモデルは、銀行の超過準備保有、通貨供給拡大下でのデフレーションの持続、財政赤字拡大下でのゼロ金利の持続、低経済成長の持続など、長期停滞下の日本で観察された主要なマクロ経済現象を同時に発生する現象として説明することができる。さらに、本稿では経済がB レジームに陥る条件を特定化し、財政拡張政策の有効性がいかなる環境下で高まるのかについても議論する。

(学習院大学)